

# 平和のための教育

津守 真

先日、ある幼稚園の保育を見学したときのことである。ひとりの男児が、ブロックをつなげてピストルをつくり打ち合いをしていたが、私にその先を向けてきた。私はどのような応答したらよいか一瞬ためらった。

このとき私の心に去来したのは、もうかなり以前から心に留まっていたいくつかのことであった。

ユネスコから出版された「平和の種子」という本の英語版を、私は二年程前に読んだ。

この書物は O M E P（世界幼年教育機構）の前世界総裁グタール女史が、世界の約十か国の教育者たちと平和教育に関する委員会をつくり、いろいろの国の実例にもとづいて討論してまとめた書物で、子どものときに日常生活の中で平和をつくり上げる体験をすること

が、世界平和の基礎であることが主題となっている。子どもたちの間で普通に起こるけんかや葛藤をこの観点からもう一度考えさせてくれる。平和のための教育は子どもを「柔弱にしたり活力を奪ったり無気力にする」こととは違う。「平和のために立ち上がり発言する者は、ときによって大きな精神的勇気を」もたねばならない。このような観点から、葛藤を平和的に処理する体験するのに大人はどうしたらよいかという、日常保育の中の問いをこの書物は提示している。世界という大きな舞台の上で教育を考えさせてくれる大切な書物である。

その書物の中で武器の玩具について次のように述べられている。「スウェーデン政府は一九七九年の一月八日から戦争玩具の販売を禁じました。一九八二年九月十三日に、欧州議会は、45対82の賛成（12の棄権）で、欧州共同体の国々で、武器で遊ぶことを法的に禁止することを決定しました。その本文は、子どもたちが武器好きになる危険性を強調し、好戦的玩具の製造と販売を次第に減少させ、建設的な玩具にとってかわるよう勧告しています。」そのすぐあとで、少年たちは精巧な戦車やピストルの玩具を好み、それらが日本製であることが記されている。日本について言及されている唯一の箇所である。

私が青年だった昭和二十年代、武器の玩具については教育界でもジャーナリズムでもしばしば論議されていた。いつのまにかそのような議論は消え、日本は武器の玩具を世界に輸出する国として知られるようになっていく。平和を愛する人間を送り出すのでなく。

そのことをあらためて考えさせられていたとき、私の養護学校で、よそから頂いた玩具

の箱の中にピストルと刀があった。養護学校の子どもたちはこういう物にあまり興味をもたないのだが、たまたまそこにいた兄弟が目ざとくみつけて、それを振り回しはじめた。私は自分が校長である学校に武器の玩具をおきたくないと思い、直ちにそれをごみ箱に捨てた。私が決然とそうしたので、そのことが大人たちの論議を呼んだ。ピストルや刀で遊んだからといって戦車を好む人間になるとは限らない、子どもの中にある攻撃性は子どもうちに解放しておかねばならない、ピストルをもたなければ相手に立ち向かえない弱い子もいる、TVで子どもたちは日常的にみている物だなど……。これらの論議を考えた上でも、私には、それには武器の玩具によるのでなく、もっと別の仕方があるのではないかと思える。武器の玩具を用いないというのは、教育を世界と歴史の視野で考える大人の決意の表明であり、保育者の心意気である。

ブロックでピストルを作り私に向けてきた子どもを前にして、これらのことが私の心を横切った。これは子どもの中から出てきたもののだが、攻撃性にせよ別の関心にせよ、それに対して大人がピストルで応ずるのでなく、もっと違った仕方で受けとめることができないかと考えた。

私は床に散らばっていたブロックの車の輪を組み合わせ、自動車と言って見せると、その子はすぐにそれに応じて自転車、三輪車などを作った。私はピストルがその子の関心

ではなかったことをその場で察した。その男の子はブロックをつなげながら、「ぼくのお父さんはラーメン屋さんで、きょうは朝かえってきた」と私に穏やかに話しはじめた。すぐ脇にいた女の子は「うちのわきの道路を通る車の音は同じでも、違う自動車なんだよ」と話す。私はその子の家は自動車の音に悩まされているのかもしれないと推察した。さっきの男の子は「うちには赤ちゃんが生れた」と話を続けた。まわりの子は口々にうちにも赤ちゃんがいるとか、「うちはもう赤ん坊じゃなくて一歳半だけど、きのうぼくは指をかまれた」など話はずんだ。「隣のうちのおじさんのクレール車は一人のりで小さいんだ」という女の子の話にヒントを得て、私は空箱を重ねて貼り、切り込みを入れてクレール車を作った。するとさっきのピストルを作っていた男の子がそのクレール車に更に箱をつみ重ね、セロテープで貼って背の高い車ができていった。私はこの子はいまや赤ん坊の生まれた家族の中で自分自身をつくりあげる過程にあるのだろうと考えた。

この日、ブロックをつなげたピストルを向けてきた男の子に、私もピストルで応答することもありえたのだが、一瞬立ち止まって、別の発想をしてよかったと思う。

この日は私は保育を見る立場にあった。クラスの全体は担任の先生がしっかりと保育をしているのだから、私は出会った子どもたちをゆっくと見ることができるといふ恵まれた立場にあった。また、私が担任をしているクラスの見学者が保育を助けてくれるつもりで見えてくると、その日の保育が一層充実する。私は自分のまわりの子どもたちをゆ

っくりと見ることに、そして必要が生じれば交わりを深めることが、保育をしている先生の助けになるだろうと考えていた。

帰りの支度がはじまったころ、お店やさんの看板の前に数人の女の子が集まり、ひそひそ話していた。看板に「おみせやさ」と書いてあり、「ん」の部分に「ん」と記号のよな字が記されている。女の子たちは「おみせやさ」まで読みながら、そのあとが「わかんない」と言う。「へんな字」という子もいる。わきにいる女児がうつむいている。私はその子たちにいろいろと話しかけたがうまく通じなかった。「ん」の斜線部は正しいのだが、曲線部にこだわるので位置関係がおかしくなるのだろう。困難に出会って細部の解決にこだわると全体像が見えなくなるのは大人も同じである。「おみせやさ」まで読めば「ん」という字を補うのは誰にも自然なことなのに女の子たちはことさらにそこを讀もうとしない。字を書けない子どもが拙いながら払う努力を見ようとしな。このような評価する人間観にこそ問題がある。大人が介入してゆかねばならないのはむしろその点であろう。

養護学校では、自我の形成の途上にある子どもたちが、他人のものををつかんで放さなかつたり、そのために押し倒したり、髪を引っ張ったりすることは絶えず起るが、他人を評価したり優越感を持ったりすることはない。その間に入って大人が潤滑油の役を果たせば、子どもたちの活力がダイナミックに働き合う共同の生活がつくり出される。能力も性質も異なった子どもたちが、それぞれ自分で遊べるようにし、互いに相違を大切に尊重す

るように保育するとき、子どもたちの集団は民主的に働き、それが子どもの社会体験となつてゆくであらう。

ここに述べたのは、一日の保育の中でたまたま私が触れたことにすぎないが、そこにも平和の体験の小さな機会がある。平和のための保育は、イデオロギーの伝達でもなく、知識の伝授でもない。それは日常の保育の中でなされる。

フランス語で書かれたユネスコ出版物『平和の種子』は、最近、OME P日本委員会によって、次の題目で日本語で出版された。

『平和の種子を育てよう——幼児期からの国際理解と平和教育』

マドレーヌ・グタール著、莊司雅子監修、OME P日本委員会訳、建帛社

世界の平和のために、親にも教師にも、ひろく一般の人々に読んでほしい書物である。そして、そのつづきを保育の場で実践してゆくことが、世界の平和に貢献する着実な道なのだと思う。

(愛育養護学校)